

第12話 新北風篇

バベルハベル

1

お元気ですか？ 風の島は少しずつ秋が深まって、気持ちのいい風が吹いています。島みんなは読書をしたり、キノコ狩りをしたり、ウィンドゴルフをしたりと、それぞれの秋を楽しんでいます。

このところ、私は図書館で借りたファンタジー小説を読んでいます。そうそう、ファンタジーと言えば、この間、司書をしている犬のドルフさんから不思議な話を聞きました。10月の満月の夜、バベルハベルという本が……。

2

風の島の図書館には、世界中の本が所蔵されています。その数、ざっと3万冊以上。大の読書家だったブビリオ・ブプリオン伯爵が人生をかけて集めたもので、500年前の本や、今は存在しない国の本、指の爪ほどの大きさの本など、珍しい本がたくさんあります。

静けさに包まれた図書館で、司書のドルフさんは黙々と働きます。本の貸し出しはもちろんのこと、本の整理をしたり、掃除をしたり、調査を手伝ったりと、図書館にはたくさんの仕事があります。利用者が本をなくしたら、鋭い鼻をくんくんさせて本を探し出さなければなりません。

3

本を虫から守ることもドルフさんの大事な仕事のひとつです。紙が大好きな虫たちにとって、図書館はまさに楽園、食べ放題のバイキング状態です。シミキングと呼ばれる虫の親分と、ドルフさんは本を巡っていちごっこ攻防戦をくり広げます。

ドルフさんは年に二回、晴れた日にすべての本を図書館の外に運び出して、ひなたぼっこをさせます。本に太陽の光を当てて、虫たちを追いつぶすのです。貴重な本はドルフさんが運びますが、この日は風の島みんなも手袋をつけて手伝います。

4

年に一回、10月の満月の夜、ドルフさんは地下にある秘密の書庫へと向かいます。書庫にあるカギのかかった箱を開けて、そこからバベルハベルという本を取り出すのです。そして、1階の窓辺のテーブルに置くと、本棚のうしろに隠れるように座って、そのとき来るのをじっと待ちます。

窓から差しこむ月光を浴びていると、バベルハベルは少しずつ動き出します。警戒心がとても強いので、周りに誰もいないことを確かめてから、表紙と裏表紙を羽のようにパタパタと動かして飛び回ります。図書館の中を自由に飛んだあと、ブルブルと体を震わせて、紙に書かれた文字を雨のように床に落としていきます。

5

床に落ちた文字たちは、ビー玉のように転がったりぶつかり合ったりしながら新しい物語を作り出します。たまに迷子になる文字もあるので、ドルフさんは目を光らせていなければなりません。図書館の隅で動けなくなっている文字をみつけたら、ほうきの柄でつついて助けてやります。

日の出が近づくと、バベルハベルは図書館を飛び回って文字たちを吸いこんでいきます。そうして、窓辺のテーブルに着地して、また本の状態に戻ります。

「さてさて、今年も司書の特権を使うとするかな」

ドルフさんは満足そうに言って、新しい物語を読みはじめました。

風の言葉

どんな仕事にも秘密の特権がある。

風の島クイズ

絵の中から見つけてね！

46音の中で描かれていないひらがなが

1つだけあるよ。その文字は何？

答えは、来月の風の島からの便りで☆